

## 第二章 浮舟の物語 京に上り、匂宮夫妻と左近少将を見比べる

[第一段 浮舟の母と乳母の嘆き]

こなたに渡りて見るに(奥方は姫の部屋に戻ってみると)、いとらうたげにをかしげにて居たまへるに(姫がとても可愛らしく風情ある姿で座していらっしゃるので)、「さりととも(やはり)、人には劣りたまはじ(妹とは出来が違う)」とは思ひ慰む(と見て安堵します)。

乳母と二人(そして乳母を相手に)、

「心憂きものは人の心なりけり(つらいのは人の気持ちです)。\*おのれは(私自身は)、同じごとと思ひ扱ふとも(姉姫も妹姫も同じ我が子と思ひ世話しているが)、この君の\*ゆかりと思はむ人のためには(姉姫が夫と慕う人のためなら)、命をも譲りつべくこそ思へ(命に代えても尽くしたいとまで思うのに)、親なしと聞きあなづりて(その相手は姉姫を親なし子と聞き軽視して)、まだ幼くなりあはぬ人を(まだ幼く成人していない妹を)、さし越えて(姉を差し置いて)、かくは\*言ひなるべしや(娶ろうなどと言って善いものでしょうか)。\*「おのれ」は注に<一人称。卑下して言うニュアンス。>とある。\*「ゆかり」は広く<縁者>を言うのだろうが、此処では<縁を結ぼうとする人=夫にする人=少将殿>になるのだろう。が、何故こういう言い方をするのか、どうも意図がつかめない。姉君を尊び、少将をそれと名指してなど呼びたくない、という母上の気持ちなのだろう、とは思うが、この本文からその母の気持は私には実感できない。\*「言ひなるべし」の「べし」は妥当意というか正当意なのだろう。

かく心憂く(こういう厭な乗り換え話を)、近きあたりに見じ聞かじと思ひぬれど(姉妹のこととして見聞きしたくはないと思ったが)、守のかくおもだたしきことに思ひて(守がこの縁談を誇らしく思って)、受け取り騒ぐめれば(承諾して騒ぎ立てているようなので)、あひあひにたる世の人のありさまを(受領と少将で釣り合いの取れた当世事情であれば)、すべてかかることに口入れじと思ふ(一切このことには口を挿まないで置こうと思います)。いかでここならぬ所に(何とか此処ではない所に)、しばしありにしがな(しばらく行っていたいものです)」

とうち嘆きつつ言ふ(と溜息混じりに言います)。乳母もいと腹立たしく(乳母もとても腹の虫が納まらず)、「わが君をかく落としむること(姫君をこんなに侮辱して)」と思ふに(と思うので)、

「何か(いえ)、これも御幸ひにて違ふこととも知らず(むしろ是も幸いに破談になったのかもしれません)。かく心口惜しくいましける君なれば(少将殿はこれほどに心浅ましくいらっしゃる人なので)、あたら御さまをも見知らざらまし(もったいない姫の御美しさが分からないのでしょう)。わが君をば(私の姫君は)、心ばせあり(思い遣りがあり)、もの思ひ知りたらむ人にこそ(物の価値が判る人にこそ)、見せたてまつらまほしけれ(嫁いで頂きたいものです)。

大将殿の御さま容貌の(源氏右大将殿の御雄姿、御威勢の素晴らしさを)、\*ほのかに見たてまつりしに(四月の宇治で少し拝し申し上げましたが)、さも命延ぶる心地のしはべりしかな(如何にも見とれるほどでした)。あはれにはた聞こえたまふなり(有難いことに大将殿は姫君を得たいと申したいらっしゃいます)。御宿世にまかせて、思し寄りねかし(御宿縁に任せて、大将殿にお決めなさいまし)」 \*「ほのかに見たてまつりし」は注に<『完訳』は「かねて交際をと願う薫に想到。乳母は

宇治の山荘で宿り合せた折、薫をかいま見たか」と注す。＞とある。四月の接遇場面は肝心の後半部が省かれていて、この辺の事情が良く分からない。ただ、逆に此処の文から、この乳母は四月の接遇時に、大将殿一行の様子だけでなく、薫殿本人の姿も少しは見たらしい、と知れる。

と言へば(と言えは)、

「あな、恐ろしや(また凄いいことを)。人の言ふを聞けば(人の話では)、年ごろ(大将殿は年来)、\*おぼろけならむ人をば見じとのたまひて(並大抵の相手では結婚しないと仰って)、右の大殿(源右大臣や)、按察使大納言(藤原大納言)、\*式部卿宮などの(式部卿宮などの親戚高家が)、いとねむごろにはほのめかしたまひけれど(とても熱心に婿に迎えようと仄めかしなさったが)、聞き過ぐして(大将殿はそれらを聞き流して)、帝の御かしづき女を得たまへる君は(帝の御秘蔵の内親王を得なさった、というほどの人が)、\*いかばかりの人か\*まめやかには思さむ(どれほど女を本気で愛しなさるでしょう)。\*「おぼろけならむ人をば見じ」は注に<薫の結婚観。『集成』は「長年、並々の人とは結婚する気はないとおっしゃって。薫が、出生の秘密や大君への執心から、権門との結婚を避けてきたことが、外部にはこう受け取られていたのである」と注す。＞とある。「おぼろけなり」は元々<並大抵だ>という曖昧な言い方だが、実は現場に居る論議の参加者には、その「並大抵」の程度がどれくらいで、実際に何を指すのかは認識共有されていて、それを明示すると差し障りがあつたり、敬語遣いなどの煩わしさもあつて、論旨を手早く進められないなどの事情から、変数記号化される語用なのだろう。が、変数である以上は、参加者各位に於いて幾分かの認識のずれも生じ易く、それが話を面白くも膨らませもし、時には破滅もさせる、という妙もある。が、それでも下文の内容からしても、この「おぼろけならむ人」は<高家であっても臣下の家格の姫>を指すだろう。\*「式部卿宮」は注に<初出の人。蜻蛉の宮と呼称される。桐壺帝の皇子。薫の叔父に当たる人。＞とある。\*「いかばかりの人か」の「の」は「人」を形容する格助詞ではなく、「を」や「ぞ」の類の強調助詞であり、だから「いかばかり」は「人」の<身分の程度>を言っているのではなく、「いかばかりの」で<一体どれほどに>という副詞句、なのだろう。「人」は<妻=女>。「か」は疑問・反語の係助詞。\*「まめやか」は、ざっと<本気なさま>だろうか。この語は、母君が薫殿を懸念する理由を示す重要な語のようではあるが、薫大将を避ける母君の本音は、やはり<家格の釣り合いが取れない>という状況判断にあるかと思う。そう思うと娘が不憫なので、薫殿が不誠実だから、という理由付けをしているのだろう。大体女は、などと知ったようなことを言う心算はないが、男も女も出会いに於ける相手の信義を期待するのは、自分の人生を賭けるのだから当然の防衛本能だが、出会いそのものの偶然性は、当人同士の気持などではなく、それぞれを存在させている客観条件に支配されていることは、特に当時の厳然とした身分社会であれば尚更に、十分に認識されていて当然で、気持の問題だけを取り上げるのは子供じみている。いや勿論、気持こそが問題となる場面はいくらでもあるが、それはそれこそ当人同士の問題で、いくら親でも立ち入れない。

かの母宮などの御方にあらせて(姫をあちらの母宮の部屋女房にさせ置いて)、時々も見むとは思しもしなむ(時々可愛がろうとお考えなのだろう)、それはた(そのような女房勤めをするとしても、また)、げにめでたき御あたりなれども(三条宮邸は確かに格式ある御殿だが)、いと胸痛かるべきことなり(女房勤めの悲哀は、姫にはとても懸念される所です)。

\*宮の上の(三の宮の御部屋様である二条院の対の御方が)、かく幸ひ人と申すなれど(その意味では恵まれた人と世間では言っているようだが)、もの思はしげに思したるを見れば(夫宮が源氏姫を娶りなさってからは、物思わしげにしていらっしゃるのを見れば)、いかにもいかにも(やはり何よりも)、二心なからむ人のみこそ(浮気をしない夫を持つことが)、めやすく頼もしきこと

にはあらめ(心穏やかで自信が持てる生き方なのでしょう)。わが身にても知りなき(自分の体験からも、そう実感しました)。\*「宮の上」は<二条院の西の対の御方>とは即ち<宇治の妹君>のことらしい。「宮の上」が一般的な呼称と言うよりは、この二人の間では宇治姫をこう呼んでいた、ということなのだろう。そういう事情まで察知して読むのが、この物語の読者に当然に求められる観劇姿勢らしい。まあ、同じ女房内なら普通に分かる事で、こういう言い方こそが分かり易いのかも知れない。

故宮の御ありさまは(故八宮の御性格は)、いと情け情けしく(とても情愛があつて)、めでたくをかしくおはせしかど(美しく上品でいらっしゃったが)、人数にも思さざりしかば(私を妻ではなく愛人と扱いなさったのが)、いかばかりかは心憂くつらかりし(どんなに情けなく厭だったか)。\*このいと言ふかひなく(今の夫は全く誇れる身分でも無く)、情けなく(風流でもなく)、さま悪しき人なれど(見映えのしない人だが)、ひたおもむきに二心なきを見れば(私一人を愛して浮気しないのを見て)、心やすくて年ごろをも過ぐしつるなり(心穏やかに何年と過ごして来れたのです)。\*「この」の「こ」は絶対近称の語用で<今の夫>を指すようだ。是自体は分かり難くはないが、対象を変えることを示す「しかるに」や「さて」などの前置句がないので、論理整理が分かり難い。

をりふしの心ばへの(何かにつけての考え方が)、かやうに愛敬なく用意なきことこそ憎けれ(今回のように粗野で配慮に欠けるところが癪に障るが)、嘆かしく恨めしきこともなく(女関係で情けなく憎むことも無く)、\*かたみにうちいさかひても(互いに、言いたいことを言い張ってでも)、心にあはぬことをばあきらめつ(納得し合ってきました)。上達部、親王たちにて(政府高官や王族方での)、みやびかに心恥づかしき人の御あたりといふとも(優雅で立派な人たちのお暮らしぶりと言っても)、わが数ならでは\*甲斐あらじ(私たちのような低い身分の者にとっては高望みなのでしょう)。\*「かたみに」は「あきらめつ」までに掛かる。「あきらむ」は<諦める>のではなく<物事を明らかにする→納得する>。是が、道理を明らかにして因果を悟り諦める、という事に繋がるのだろう。\*「かひ」は<効果、意味>で、格好をつけても中身が伴わない、みたいなことなのだろう。

よろづのこと、\*わが身からなりけりと思へば(全ては生まれつきの身分で決まる人生なのだと思えば)、よろづに悲しうこそ見たてまつれ(私の腹に生まれついた姫は、何につけても不憫に思われ申しますので)、いかにして(せめて何とか)、人笑へならずしたてたてまつらむ(笑い者に成らないようにして差し上げたいのです)」\*「わが身から」は<自分の立場から定まっている=生まれついた身分の所為>ということらしい。

と語らふ(と奥方は話します)。

[第二段 継父常陸介、実娘の結婚の準備]

\*守は急ぎたちて(夫の守の方は、愛娘の嫁入り準備に掛かり切りになって)、\*「かみ」は完全に三枚目の役回りに立たされているので、この幕は落語に成りそうだ。

「女房など、こなたにめやすきあまたあなるを(女房たちは此方に無難な者が多いようなので)、このほどは、あらせたまへ(この婚儀の間は、娘の世話に貸してくれ)。やがて(このままで)、帳なども(ちゃうなども、帳台なども)新しく仕立てられためる方を(新しく拵えてあるようだから)、

事にはかになりたれば(事情が急に変わったので)、取り渡し(移動させたり)、とかく改むまじ(あれこれ変えずに、此処をこのまま娘に使わせよう)」

とて(と言って)、\*西の方に来て(姉姫の西部屋に来て)、立ち居、とかくしつらひ騒ぐ(立ったり座ったりして、何かと差配を煩く言います)。 \*「にしのかた」は注に<浮舟の部屋に常陸介が来て。>とある。そして、渋谷訳文には<西の対に来て>とまである。姉姫の部屋が西の対だとは、今までには語られていない。何処かに書かれているのだろうか。ただ、この二章一段の冒頭にも「こなたに渡りて見るに」とあって、「渡る」は領界を越える語感なので、「こなた」が寝殿とは別棟であるような気もするが、同じ棟の間仕切りを越えたということかもしれず、判然としない。今のところは、この「西の方」は<西部屋>と言って置く。

めやすきさまにさはらかに(奥方が品良く整然と)、あたりあたりあるべき限りしたる所を(室内を整えてある所に)、さかしらに屏風ども持て来て(夫の守は得意気に屏風類を持ち込ませて)、いぶせきまで立て集めて(所狭しと並び立てて)、厨子(づし、置き戸棚や)二階(にかい、二段物置)など、あやしきまでし加へて(などを不要なまにに加えて)、心をやりて急げば(成金趣味丸出しで準備するので)、北の方見苦しく見れど(奥方は見苦しく思ったが)、口入れじと言ひてしかば、ただに見聞く(口を挿まないと云ったので、ただ見聞きします)。御方は、\*北面に居たり(姉姫は北庇に移っていました)。 \*「きたおもて」は注に<浮舟は西の対の南北に仕切った北側の部屋にいた。>とある。此処まで具体的に注記されると根拠があるのか、この書き方自体でそういう意味になるのか、私には分からないが、「おもて」は<戸外>でもあり、姉姫は母屋から追われて御簾外の北庇に居る方が、継子虐めとしての演劇効果は高い。

「\*人の御心は、見知り果てぬ(母親の御気持は良く分かりました)。ただ同じ子なれば(全く同じ自分の子なのだから)、さりともし(いくらなんでも)、いとかくは思ひ放ちたまはじとこそ思ひつれ(此処まで見放しはなさるまいと思いましたが)。さはれ(まあいいでしょう)、世に母なき子は、なくやはある(世の中に母の無い子は居ないでもない)」 \*「ひとのみこころ」は<母親の気持>のようだが、「御」の敬称が付くことに改めて驚く。これが守の憎めない所、なのだろう。

とて(と守は妹姫の婚礼準備を傍観する奥方を評して)、娘を、昼より乳母と二人、撫でつくろひ立てたれば(娘を昼から乳母と二人で撫でるように繕い立てたので)、憎げにもあらず(妹姫は醜い事も無く)、\*十五、六のほどにて、いと小さやかにふくらかなる人の(十五、六歳のとても小柄のふくよかな人で)、髪うつくしげにて小桂のほどなり(髪は美しく小桂ほどの長さで)、裾いとふさやかなり(毛先も痩せていないで艶やかです)。これをいとめでたしと思ひて(守はこの娘をととても美しいと思って)、撫でつくろふ(大事に着飾らせます)。 \*「十五、六のほどにて」は注に<浮舟の異父妹の年齢。当時としては結婚に早すぎる年齢ではない。>とある。確かに、「幼い」と言われていたのが変に思える年齢だ。姉姫との年の差も五、六歳で、極端に離れているとまではいえない。姉が妹を可愛がって、仲良く育っても不思議は無い年回りだが、どうもそういう雰囲気は無いので、分けて育てられたらしい。

「何か、人の異ざまに思ひ構へられける人をしも(何も母親が姉君の婿にと考えて進めていた婚儀を、妹姫に横取りさせることはない)、と思へど(とは思うが)、人柄のあたらしく(少将殿は人品が尊く)、警策にものしたまふ君なれば(優秀でいらっしゃる方なので)、我も我もと、婿に

取らまほしくする人の多かなるに(我も我もと婿に迎えようとする人が多いので)、取られなむも口惜しくてなむ(他家に取られるのは惜しまれる)」

と(と守が)、かの\*仲人にはかられて言ふもいとをこなり(かの仲人に乗せられたままに言うのも実に馬鹿げています)。男君も(新郎である少将殿も)、「このほどのいかめしく思ふやうなること(この婚礼準備の豪勢で行き届いたこと)」と、\*よろづの罪あるまじう思ひて(と、姉から妹へ姫を乗り換えたことに、何の支障も無いようだと楽観して)、その夜も替へず来そめぬ(予定の通り初めの日取り通り、その夜から妹姫の許へ通いました)。\*「なかうど」と本文に語られるのは初めてだ。「媒(なかだち)」と説明されたのも一章八段になってからだった。本当に現代語文の客観文体とは感性が違う。\*「よろづの罪」はく姉から妹に乗り換えたことによる支障らしい。

### [第三段 浮舟の母、京の中君に手紙を贈る]

母君、御方の乳母、いとあさましく思ふ(母君も姉姫の乳母も、この人たちの有様をととも情けなく思います)。\*ひがひがしきやうなれば(この結婚が横しまなので)、とかく見扱ふも心づきなければ(取り繕って大人の対応をするのも、母君たちには気に入らず)、宮の北の方の御もとに、御文たてまつる(ほとぼり冷ましの避難場所を請うべく、姫の異母姉である二条院の対の御方に、御手紙を差し上げます)。\*「ひがひがしきやう」の対象は何か。母君たちがへソを曲げている、ということはあるだろうが、それというのも、この婚儀が横取りと言う不正な手続きで強行された、という正々堂々としていない不恰好さがある所為なのであり、やはりこの婚儀自体の形容と取って置く。

「そのこととはべらでは(特に用事も無しには)、なれなれしくやとかしこまりて(馴れ馴れし過ぎるかと思慮されまして)、え思ひたまふるままにも聞こえさせぬを(御出産後いかがお過ごしかと思ひ申しながらもお手紙も差し上げ申しませんでおりますが)、\*つつしむべきことはべりて(厄払いしたい事がありまして)、しばし所変へさせむと思ふたまふるに(姫を暫く所替えさせようと思っておりますが)、いと忍びてさぶらひぬべき隠れの方さぶらはば(ごく目立たずに滞在できるような隠れ処がございましたら)、いともいともうれしくなむ(本当にとっても嬉しいのですが)。数ならぬ身一つの蔭に隠れもあへず(姫は頼りない私の庇護で守りきれず)、あはれなることのみ多くはべる世なれば(気の毒な事が多い事情なので)、頼もしき方にはまづなむ(あなた様を頼もしい方と、先ず一番に考えました)」\*「つつしむべきことはべりて」は注に<物忌みと偽って、浮舟をそちらに方違えさたい、と願う。>とある。「物忌みと偽って」とあるが、陰陽師の診立てによる暦占いの他に、個人的に不都合な事があった時に厄払いをする、という行為は願掛けとして一般的に通用する考え方で、その厄払いとして転地する、というのも、実際にそれで当人の気晴らしになる事は多いだろうから、効験も分かり易く、言ってみれば今の小旅行だが、余裕のある家であれば、当時でもそういう慣行はあって不思議では無く、「逸つ割り」ではなく<言割り>として、正直な理由立てであったのではないか。正直というのは、何も詳しい事情を話すという意味ではなく、憂さ晴らしという言い方で十分正当な理由になっただろうという意味で、詳しい事情は後で当人に聞くとか、文遣いの様子から御方の方が事情を察するとか、その辺は、また別の話だ。

と、うち泣きつつ書きたる文を(と母君が泣きながら書いた手紙を)、あはれとは見たまひけれど(御方は可哀想にとは思いなさるが)、「故宮の(亡き父宮が)、さばかり許したまはでやみにし人を(認知なさらずじまいだった人を)、我一人残りて(私一人が生き残った縁者として)、知り語

らはむもいとつつましく(親しく付き合うのもとても気が引けるし)、また見苦しきさまにて世にあぶれむも(かといって、その人が辛い立場で世をさまようのを)、知らず顔にて聞かむこそ心苦しかるべけれ(知らぬ顔をして聞くのも気が重い)。\*ことなることなくてかたみに散りぼはむも(仲良くする事なしに互いに行き来が無いのも)、亡き人の御ために\*見苦しかるべきわざ(父宮の御縁に背きそうだ)」を思しわづらふ(と困りなさいます)。 \*「ことなること」は<殊なる事、特別なこと>ではなく<事馴ること、仲良くすること>なのだろう。 \*「見苦し」は<不都合に思える>で、見た目が悪いのは<見にくし>。

\*大輔がもともにも(母君は旧知の女房の大輔のところにも)、いと心苦しげに言ひやりたりければ(姫がとても気懸かりだと言うように言って来ていたので)、 \*「大輔(たいふ)」は注に<中君付きの女房。『完訳』は「浮舟の母とは往年の同僚女房」と注す。(早蕨巻二章一段、宿木巻五章四段、宿木巻七章四段、大輔の君)>とある。

「さるやうこそははべらめ(よほどの事情があるのでしょう)。人憎くはしたなくも(冷淡に突き放したり)、なのたまはせそ(仰いませんように)。かかる劣りの者の(このような劣り腹の血縁者が)、人の御中に交じりたまふも(高家の姉妹の中に交じるのも)、世の常のことなり(普通のことです)」

など聞こえて(などと大輔は御方に申し上げて、相談の上)、

「さらば(それでは)、\*かの西の方に(西の対のどこかに)、隠ろへたる所し出でて(目立たないように御部屋を用意して)、いとむつかしげなめれど(とても粗末なようでも)、さても過ぐいたまひつべくは(そのように隠れ住みなさる分には)、しばしのほど(暫くなら、お泊りいただけます)」 \*「かの西の方」とは何処の事なのか。「かの」の「か」が、指示代名詞で言う近称の「こ」、中称の「き・そ」、遠称の「か・あ」、不定称の「だ・ど」、とある内の遠称なら、面對している者同士の会話の場合は、その現場からは見えていない何処かの具体的な場所を指すことになる。が、此処では女房の大輔が守の奥方に手紙で返事しているので、二人は同席しておらず、此処で言う「かの」は具体対象を示したのではなく、共通の生活基盤に基づいて相手が想像し得るであろう<とある一定容量の>という外形様式を意図した言い方なのだろう。

と言ひつかはしつ(と母君に言い交わしました)。いとうれしと思ほして(母君はとても嬉しいとお思いになって)、\*人知れず出で立つ(ごく身近な者たちだけで出発します)。御方も、かの御あたりをば(姫君も二条院の御方を)、睦びきこえまほしと思ふ心なれば(親しくしたいと思う気持ちがあったので)、なかなか(今度の行き違いで、却って)、かかることどもの出で来たるを(こういう機会が出来たのを)、うれしと思ふ(嬉しく思います)。 \*「人知れず」は<夫に無断で>かとも思えたが、さすがにそれは有り得ないだろうから、特に外出と騒ぎ立てずに<こじんまりとした出で立ち>で出で立った、という洒落なのだろう。

[第四段 母、浮舟を匂宮邸に連れ出す]

守、少将の扱ひを(守は少将を新郎として歓待するのに)、いかばかりめでたきことをせむと思ふに(出来るだけ立派な披露宴をしようと思うが)、そのきらきらしかるべきことも知らぬ心には(どうすれば豪華にできるかを知らない)、ただ、あららかなる\*東絹どもを(ただ粗雑な関東

絹を)、\*押しまろがして投げ出でつ(引出物として巻絹にして従者たちに投げ与えました)。食ひ物も、所狭きまでなむ運び出でてののしりける(食べ物も所狭しと宴席に並べ出して大騒ぎして祝います)。\*「東絹(あづまぎぬ)」は<東国産の絹織物(大辞林)>で、畿内のように洗練されていない粗雑な織物を言うらしい。\*「押しまろがして投げ出でつ」は注に<少将の下人たちへの引出物として、無造作に簾の下から投げ出した。巻絹にして与える。腰差という。>とある。「腰差(こしざし)」は<かずけ物として賜わる絹を丸く巻いた物。もらった時、腰に差して退出するのでいう。>と古語辞典にある。

下衆などは(下働きの従者などは)、それをいとかしこき情けに思ひければ(分かり易いそれらの褒美をとて手厚い持成しと思つて喜んでいたので)、君も(少将君も)、「いとあらまほしく、心かしく取り寄りにけり(実に有難く、賢明な縁組だった)」と思ひけり(と思つたのです)。北の方(奥方は)、「このほどを見捨てて知らざらむもひがみたらむ(こういう馬鹿げた婚礼を見捨てて列席しないのも母親として意固地に過ぎる)」と思ひ念じて(と思つて我慢して)、ただするままにまかせて見たり(ただ夫がするに任せて見ていました)。

\*客人の御出居(まらうとのおおんでゐ、客人である少将殿の控室や)、\*侍ひとしつらひ騒げば(従者たちの控室などを用意すると)、家は広けれど(常陸介邸は広いのだが)、\*源少納言、東の対には住む(長女の婿の源少納言が東の対には住み)、\*男子などの多かるに(他に子息たちも多くいたので)、所もなし(手狭でした)。\*「客人」は少将のようだが、是を御婿と呼ばないのは、客人扱いをしようと思ふ母上の気持ちに添った語り、ということなのだろうか。\*「侍ひと(さぶらひ)」は<従者の控室>らしい。\*「源少納言」は注に<先妻の娘婿が東の対に住む。係助詞「は」は他との区別のニュアンス。>とある。\*「男子(をのこご)」は注に<常陸介の男の子たち。>とある。

この御方に客人住みつきぬれば(この姉姫の御部屋に客人が住み着いてしまうと)、廊などほとりばみたらむに住ませたてまつらむも(姫を廊下部屋などの外れに住ませ申すのも)、飽かずいとほしくおぼえて(不十分な粗末な扱いに思えて)、とかく思ひめぐらすほど(母君は彼是と考えて)、宮にとは思ふなりけり(二条院へお連れ申そうと思つたようです)。

「\*この御方さまに(この姫を王族に)、数まへたまふ人のなきを(故人宮が認知なさらなかったことを)、あなづるなめり(夫は見くびっているのだろう)」と思へば(と母君は思うので)、ことに許いたまはざりしあたりを(わざわざ故宮が御認め下さらなかった王族宮家を)、あながちに\*参らず(敢えて姫を訪ねさせるようです)。乳母、若き人びと、二、三人ばかりして(姫は乳母と若女房の二、三人だけを伴つて)、西の廂の北に寄りて(二条院西の対の西の廂の北側に寄つて)、人げ遠き方に\*局したり(人の出入りの少ない所に部屋住みしたのです)。\*「このおおんかたさま」は何を言っているのか分かり難い。ただ、「数まへたまふ人のなき」は<「人の数まへたまふことのなきこと」=故人宮が認知なさがることがなかったこと>という言い方だろうから、この「方様」は<本来の姿=王族>ということになりそうだ。\*「まゐらず」の「ず」は、古語辞典に<推量の助動詞「うず」が単に「ず」となつて現れたもの。(むとす→むす→うず→ず、と転化)。>とある、語用らしい。\*「局す(つぼねす)」は<小部屋を用意する>という言い方にもなるだろうが、此処では主語が姉姫なので<小部屋住みする>のだろう。

年ごろ(年来)、かくはかなかりつれど(このように疎遠になつていたが)、\*疎く思すまじき人なれば(御方にとって守の奥方は他人と思うことはお出来にならない遠縁に当たる人なので)、参

る時は\*恥ぢたまはず(一行が到着した時は体裁ぶらず自ら出迎えなさって)、いとあらまほしく(実に宮家らしく優美で)、\*けはひことにて(守家の田舎臭さとはまるで違うので)、若君の御扱ひをしておはする御ありさま(赤ん坊を抱いて幸せそうにしていらっしゃる御姿を)、うらやましくおぼゆるもあはれなり(守夫人が羨ましく思うのも一入です)。\*「疎く思すまじき人」は注に<浮舟の母は中君の母の姪に当たる縁者。(宿木巻七章四段、中将の君)>とある。\*「恥ぢたまはず」は注に<主語は中君。『集成』は「几帳に身を隠したりはなさないで」と注す。>とある。「恥づ」は<恥らう、遠慮する>という言い方ではあるようで、特に現代語の「恥じる」ではそうだが、全くの私見ながら、「はづ」は<「端出」=綻びを見せる>という意味で、だから<みともない、極まり悪い、引け目を感じる>のであり、それを避ける事まで含んで<ボロを隠す、格好をつける、体裁ぶる>という語用があるのではないか。元々、室内で几帳などで身を隠すのは、建物が間仕切り構造になっていないからではあるにせよ、逃げ隠れているのではなく、人目を気にせずに寛ぎたいのであり、特定の誰かを意識して緊張するのは特別な場合であり、普段は他人に対して立ち入りを遠慮せよと示している。特に母屋の御簾などは、それ自体が人を見下しているようでさえある。だから、この「恥ぢたまはず」は<恥づかしがりなさらず>ではなく<勿体を付けなさらず>だ。\*「けはひことにて」は注に<『集成』は「とても上品な感じで」。常陸介邸の様子とはまるで違った感じ。>とある。なるほど是は、守家の田舎臭さとは違って、という言い方なのだろう。下の「あはれなり」は是を受けている、と読みたい。

「我も、\*故北の方には、離れたてまつるべき人かは(私も御方の母君である八宮の故奥方には縁遠く申し上げる者ではないのに)。\*仕うまつるといひしばかりに(女房仕えだったばかりに)、数まへられたてまつらず(我が娘が八宮に認知して頂けず)、口惜しくて(残念ながら)、かく\*人にはあなづらる(このように世間から侮られるのだ)」\*「故北の方」は注に<中君の母北の方。>とある。\*「仕うまつるといひしばかりに」は注に<女房として仕えたばかりに。>とある。「いふ」は<「言ふ」=言葉にする>ではなく、「といふ」で上句上文の事情を別視点で独立事項として再評価する意図を示す論理語用。此处では<~といったことだった>という言い方。\*「人」は狭義には少将だろうが、守や仲人をはじめ、現にこうして御方との立場の差もあって、結局は世間の評価ということになりそうだ。

と思ふには(と思う守夫人の気持からすれば)、かくしひて睦びきこゆるもあぢきなし(このように無理をして御方に娘の庇護を頼んで親しみを示し申すのも不満です)。\*ここには(滞在部屋には)、御物忌と言ひてければ(厄除け籠もりと言ってあるので)、人も通はず(誰も入ってきません)。二、三日ばかり母君もあたり(二、三日ほどは母君も同宿しました)。\*こたみは(今回は一年前の前回の訪問時とは違って)、心のどかにこの御ありさまを見る(じつくりと二条院の御様子を見ます)。\*「ここ」は注に<浮舟のいる部屋。>とある。\*「こたみ」は前回の訪問時との比較。前回は宿木巻六章四段に御方が「さいつころ来たりし」と薫君に語っていた時のことになりそうだ。となると、今年の八月末か九月初めくらいだろうか。ほぼ一年前だ。

#### [第五段 浮舟の母、匂宮と中君夫妻を垣間見る]

宮渡りたまふ(匂宮が二条院にお越しになります)。ゆかしくてもののはさまより見れば(守夫人は様子が見たくて物陰の隙間から見ると)、いときよらに(三の宮はとても端然として)、\*桜を折りたるさましたまひて(桜の花枝を折ったような艶姿をなさっていて)、わが頼もし人に思ひて(自分が夫として頼り)、恨めしけれど(不満はあるが)、心には違はじと思ふ\*常陸守より(誠意はあると思っている常陸守より)、さま容貌も人のほども(人柄や見映えも)、こよなく見ゆる\*五位



四位ども(ずっと上品に見える五位や四位たちの宮の従者が)、あひひぎまづきさぶらひて(揃ってひぎまづいて控えて)、このことかのことと(彼是と)、あたりあたりのことども(諸事の報告やお伺いを)、家司どもなど申す(二条院の管理人たちが宮に申し上げます)。\*「桜を折りたるさま」は訳文に<桜を手折ったような姿>とある。図書館で小学館日本古典文学全集他の諸注を雑観したところでも、美しさを形容する成句として<手折った桜のような艶姿>をいうらしい。また、「全集」の注には似た表現として「花を折る」や「花桜折る」などの指摘もあった。が、「花桜折る」は「堤中納言物語(平安後期の短編物語集。天喜3年(1055)女房小式部作の「逢坂越えぬ権中納言」以外は、作者・成立年代未詳。「花桜折る少将」「虫めづる姫君」「よしなしごと」など10編と一つの断章からなる。〔大辞泉〕)」の花桜を折った心算で姥桜を連れ込んだ色男の滑稽譚がヒットするし、「花を折る」は<《花を折ってかざす意から》美しく着飾る。>と大辞泉にあり、此処の「桜を折りたるさま」とは微妙に違う表現のような気もする。もし、この「桜を折りたり」が「花を折る」の言い換えだとするなら、「桜を折りたり」は<桜の枝を飾り物にするために手折ったように、派手に着飾っていた>という言い方になって、敬語遣いが無いのは成句の成せる業だとしても、「桜を」の「を」は「折る」の対象が「桜」である事を示す格助詞であり、主文意は「折る」という主体者の意識と行為に置かれる構文となって、「折りたり」の<折っている>という表現が作者の主張意図ということになる。であれば、それは<桜の花枝のような艶姿>を言っているのではなく、艶姿足らんと着飾っている匂宮の努力姿勢を言っていることになるが、私の読文印象でも「きよら」と前置きされた是は<艶姿自体>を言っているように見える。ということは、構文が違うわけだ。「折りたり」の「折り」はラ行四段活用の他動詞「をる」の連用形なので<折れている>のではなく<折られている>のだが、「たり(てあり)」の格助詞「て(として)」は確定認識を示す語用の他に暫定認識を示す場合もあり、必ずしも「桜を」の「を」を対象指示の格助詞に規定しない、のだろう。即ち、この「を」は主体を示す格助詞「の」の強調形であって、「桜を折りたり」は<桜が折られている>としたような>という言い方になっている、のではないか。一応、左様に読んで置く。それにしても、晩秋になろうかという時期に「桜」とは唐突な語り口に聞こえるし、何か此処の記事に関連のある実相にまつわる逸話でも下敷きにしているのかとも思えるような、非常に面倒なこの「桜を折りたるさま」の解釈について、注釈項目にすらなっていないことに私は驚き呆然としている。\*「常陸守(ひたちのかみ)」と呼称している。正式には常陸介だが、親王の常陸宮は「太守(たいしゅ)」と称されたらしいので、常陸守の方が実態に即しているのだろう。略称の「守(かみ)」は既に使われて来ている。\*「五位四位」は殿上役人なので、常陸守より位階も上位者に当たるのだろう。位階で装束が決まっていたらしいので、遠目でも判断できたようだ。

また若やかなる五位ども(他に年若い五位の貴公子たちで)、顔も知らぬどもも多かり(守夫人が顔も知らないものも多かったが)、\*わが継子の式部丞にて蔵人なる(常陸守の先妻の子で式部省三等官で帝側近でもある継子が)、内裏の御使にて参れり(帝の御使者役で参上したが)、御あたりにもえ近く参らず(三の宮の御側にはとても近づけません)。\*「わが継子の式部丞にて蔵人なる」は注に<常陸介の先妻の子。式部丞兼蔵人。六位相当官。>とある。「式部丞(しきぶのぞう、しきぶのじょう)」は公式行事の式次第を司る式部省の三等官、とのこと。高家の役職ではないらしいが、格式は高そうで、常陸守の受領としての威勢の良さが示されているのかも知れない。六位蔵人であれば貴公子たちとの付き合いもありそうで、「内裏の御使(うちのおおんつかひ)」も名誉であり、六位ながら当然に殿上を許された出世株だ。

こよなき人の御けはひを(そうした三の宮の雲上人ぶりを)、

「あはれ、こは何人ぞ(ああ、何という尊さか)。かかる御あたりにおはするめでたきよ(こういう宮邸にいらっしゃる御方の何という御幸運か)。よそに思ふ時は(実態を知らずに考えていた分には)、めでたき人びとと聞こゆとも(雲上世界と申しても)、つらき目見せたまはばと(御方の

悲哀を聞くに付け、女を悲しませなさるのでは感心しないと)、もの憂く推し量りきこえさせつらむあさましさよ(嫌なものの様に推し量り申し上げていた私の世間知らずぶりだったこと)。この御ありさま容貌を見れば(この三の宮の御尊厳、御姿を見れば)、七夕ばかりにても(七夕のような年に一度の逢瀬でも)、かやうに見たてまつり通はむは(このようにお目に掛かりお通い頂けるのは)、いといみじかるべきわざかな(とても有難いことだ)」

と思ふに(と守夫人が思っていると)、若君抱きてうつくしみおはす(三の宮は若君を抱いて可愛がっていらっしゃいます)。女君(二条院妻の御方は)、\*短き几帳を隔てておはするを(小さな几帳を匂宮との間に隔てて置いていらっしゃったのを)、押しやりて(横に退けて)、ものなど聞こえたまふ御容貌ども(お話しなさる御二人の夫婦姿は)、\*いときよらに似合ひたり(実に美しくなっています)。故宮の寂しくおはせし御ありさまを思ひ比ぶるに(亡き八宮が失脚して寂しく暮らしていらっしゃった御姿と思ひ比べると)、「宮たちと聞こゆれど(同じ親王と申し上げても)、いとこよなきわざにこそありけれ(ずいぶん違うもんだわ)」とおぼゆ(と守夫人には思えます)。\*「短き几帳」は注に<三尺の几帳。夫匂宮との間に置く。>とある。\*「いときよらに似合ひたり」は注に<匂宮と中君。似合いの夫婦。『完訳』は「中の君の居所は西の対。中将の君は西廂の北側からかいま見る」と注す。>とある。が、実際には、ほとんど見えないはずだ。三の宮と御方の睦まじそうな雰囲気を感じて、守夫人が想像したこと、のようにも聞こえる。

\*几帳の内に入りたまひぬれば(御二人が御帳台の中にお入りになったので)、若君は、若き人、乳母などもあそびきこゆ(若君は若女房や乳母があやし申します)。\*人びと参り集まれど(役人たちが宮の指示を仰ぎに参集していたが)、悩ましとて(宮は疲れたと言って)、大殿籠もり暮らしつ(お休みになったまま一日過ぎなさいます)。\*御台こなたに参る(御食事も此方で召し上がります)。\*「きちやうのうち」は注に<主語は匂宮。諸本は「丁(帳)」とある。とすると、御帳台の中に、の意となる。>とある。確かに、几帳は面を隔てるもので、空間の間仕切りは示さない語感なので、「御帳の内(みちやうのうち)」が良さそうだ。\*「人びと」は注に<『完訳』は「宮の威勢に追従する官人たち」と注す。>とある。「参る(まゐる)」は<仕事に参じる>のだろう。\*「御台(みだい)」は御膳、御食事。

\*よろづのこと気高く(御方の二条院でのお暮らしぶりが万事に気品高く)、心ことに見ゆれば(格別なものに思われたので)、\*わがいみじきことを尽くすと見思へど(守夫人は自分なりに姉姪に最善の御世話を尽くしていると考えてみても)、「なほなほしき人のあたりは(並の身分の受領家でする事は)、口惜しかりけり(高が知れている)」と思ひなりぬれば(と思ひ至ったので)、\*「よろづのこと」の対象主体については、下に「わが娘も、かやうにてさし並べたらむに」とあるので、守夫人が自分の娘と見比べるのだから、対の御方だ。\*「わがいみじきことを尽くすと見思へど」は注に<以下「口惜しかりけり」まで、母北の方の思い。わが家で浮舟のためにどんなに善美を尽くそうとしても。>とある。注に「尽くそうとしても」とあるが、「尽くす」は現在終止形で<尽くしている(こと)>をしめしている。過去の「尽くせり」や、現在進行の「尽くしつ」でもなければ、未来意志の「尽くさむ」でもなく、むしろ其等を全部含んだ総体だ。「見思ふ」は<全体を見通して考える=考えてみる>。

「わが娘も、かやうにてさし並べたらむには(我が娘もこのように御方と同じ立場になるのに)、かたはならじかし(不足は無い血筋の筈だ)。勢ひを頼みて(金に物を言わせて)、父ぬしの、后にもなしてむと思ひたる人びと(父親が皇后にでもさせたいと思っている娘たちとは)、同じわが子

ながら(同じ私の腹に設けた子ではあるが)、けはひこよなきを思ふも(出来が違うのを見ても)、なほ今よりのちも(やはり姉姫の相手は今後も)、心は高くつかふ\*べかりけり(理想は高く持つべきなのだった)」と、夜一夜あらし語り思ひ続けらる(と一晚中、姉姫の結婚に付いての今後の方針を考え続けさせられます)。 \*「べかりけり」の過去認識は、元々そうだったと、姉姫の王族血筋資質を再確認した言い方。

[第六段 浮舟の母、左近少将を垣間見て失望]

宮、日たけて起きたまひて(三の宮は日が高くなってからお起きになって)、

「後の宮(母宮が)、例の(変わりなく)、悩ましくしたまへば(お悪くていらっしゃるので)、参るべし(御見舞に参じます)」

とて、御装束などしたまひておはす(とって御正装を着付けていらっしゃいます)。ゆかしうおぼえて覗けば(守夫人が興味深く覗き見ると)、うるはしくひきつくろひたまへる(見事に身支度なさった宮の御姿は)、はた、似るものなく気高く愛敬づききよらにて(他に例えようもなく気品があり、それでいて堅苦しきなく動きに無駄がない着慣れた様式美で)、若君をえ見捨てたまはで遊びおはす(若君を可愛がってあやしていらっしゃいます)。御粥(おおんかゆ、汁ご飯や)、強飯(こはいひ、見舞の縁起赤飯)など参りてぞ(などを召し上がって)、\*こなたより出でたまふ(この西の対に御車を着けさせて、出発なさいます)。 \*「こなたより」は注に<句宮は寝殿に戻らず、中君のいる西の対から出かける。>とある。だから、守夫人にも様子が窺えた、という説明なのか、寝殿から出掛けないことに何か意味があるのか、単純描写なのか、私には此処の文意がよく分からない。

今朝より参りて(早朝から二条院に馳せ参じて)、さぶらひの方にやすらひける人びと(侍所で待機している従者たちが)、今ぞ参りてもものなど聞こゆる中に(御出発に際して名乗り挨拶申し上げている中に)、\*きよげだちて(一際威儀を正して)、\*なでふことなき人の\*すさまじき顔したる(普通の護衛官で厳しい顔をした)、直衣着て太刀佩きたるあり(略礼装で帯刀している武人がいました)。御前にて何とも見えぬを(守夫人は宮に見とれて気付かなかったが)、 \*「きよげだちて」は渋谷訳文にくめかしこんで>、与謝野訳文に<気どったふうを見せながら>とあるが、近衛少将の公務の出で立ちを決まった制服がある筈で、特別な着こなしは無いように思う。また少将位であれば、この隊列の最高指揮官であって、その責任の重さからしても、式典ではない護衛現場で<気取る>はずもなく、この「清げ」は<整然とした様>で、「立つ」は<一際目立つ=特徴がはっきり出ている>で、「きよげだつ」は<非常に威儀を正している>という形容なのだろう。その堅苦しさが、三の宮の優美さと対比されるからこそ、この場面が引き立つ、ように思う。 \*「なでふことなし」は<何とすることも無い=大した事がない>という修辞だが、この<特に言うことがない>は<日常性=通常の護衛様式=普通の護衛官>のことなのだろう。 \*「すさまじ」は<興奮めだ。荒涼としている。程度がはなはだしい。>などと古語辞典にあるが、此処では比較対象が句宮の優美さだから<興奮めだ→風情が無い→堅苦しい→厳しい>と読むと面白いだろうか。

「かれぞ(あの人が)、\*この常陸守の婿の少将な(今此処にお泊りの常陸守家の婿の少将ですよ)。初めは\*御方にと定めけるを(初めは今お泊りの方を嫁にと決めていたものを)、守の娘を得てこそ\*いたはられめ(守の娘の婿になってこそ資金援助が受けられる)、など言ひて(などと言っ

て)、\*かしけたる女の童を持たるななり(年下の未熟な妹を嫁に持ったそうなの) \*「この」は二条院の女房たちから見て<今滞在している>という言い方なのだろう。 \*「おおんかた」は客人である姉姫に対する敬称らしい。 \*「いたはらる」は<労って貰える=世話してもらえる>。 \*「かしく」は<憔悴する。衰える。やつれる。しばむ。>と古語辞典にある。「傾ぐ(かしぐ、かたむく)」に近い語だろうか。此処では妹姫を<劣った>と言っても、その妹の実の母でもある守夫人には失礼になりそうなので、この女房たちに其処までの配慮があるとしたら<未熟>くらいの言い方だろうか。

「いさ、この御あたりの人はかけても言はず(でも、此処の御客人たちはそんな話は一切しませんよ)」

「かの君の方より(むこうの少将君の家の女房から)、よく聞きたよりのあるぞ(よく事情を聞く伝手があるんですよ)」

など(などと二条院の女房たちが)、おのがどち言ふ(思い思いに言います)。聞くらむとも知らず(当の守夫人が聞いているとも知らずに)、人のかく言ふにつけても(女房たちがこう言っているのを)、胸つぶれて(守夫人はすっかり内情が世間知られていると知って驚き)、少将をめやすきほどと思ひける心も口惜しく(少将を姉姫に相応しい相手と考えていた自分の判断も情けなく)、「げに(実際に)、ことなることなかるべかりけり(たいしたことのない人物だった)」と思ひて(とあって)、いとどしくあなづらはしく思ひなりぬ(少将をまるっきりつまらない者に思うようになりました)。

若君のはひ出でて、御簾のつまよりのぞきたまへるを(若君が這い出して御簾の端から覗いていらっしゃるのを)、うち見たまひて(三の宮は見つけなさって)、立ち返り寄りおはしたり(母屋に戻って近付きなさいます)。

「御心地よろしく見えたまはば(母宮の後気分がよろしくお見えでしたら)、やがてまかでなむ(直ぐに帰って来ます)。なほ苦しくしたまはば(ですがお悪ければ)、今宵は\*宿直にぞ(今夜はあちらの殿に泊まりになります)。今は、一夜を隔つるもおぼつかなきこそ苦しけれ(今は若君に一晚離れて会えないのもとても気懸かりだ)」 \*「とのゐ」の「殿」は御所かと思われるが、体調不良なら明石中宮は六条院に戻っているかもしれない。

とて、しばし慰め遊ばして(と言って若君を暫くかまって)、出でたまひぬるさまの(お出掛けなさった様子が)、返す返す見るとも見るとも(何度思い出してみても)、飽くまじく(全てに満たされていて)、匂ひやかにをかしければ(華やかで豊かな情緒だったので)、出でたまひぬる名残(宮がお出掛けになった後の二条院の静けさを)、\*さうざうしくぞ眺めらるる(守夫人は気が抜けたように呆然と眺める気分になります)。 \*「さうざうし」は<物足りない。心寂しい。>という言い方が多いようだが、古語辞典には<当然あるべきものがない状態>と説明があり、それを不安に思う気持ち、あたりが基本概念にあるらしく、此処では中心人物の匂宮が居なくなって、ぽっかり穴があいた気分、なのだろう。